

もう一つの実践・国際交流

第9回 海外研修 (フランス)報告

全 個 連 会 報
特 別 号

平 成 1 3 年
2 月 2 2 日
発 行 責 任 者
染 田 屋 謙 相

フランス研修旅行

フランスの教育の特色に学ぶ

東京学芸大学教授 浅沼 茂

今回のフランス研修旅行では、いろいろなことを学びました。パリの観光、そしてブサンソンでの学校、晩餐、教育委員会、青年キャンプ、農家での子どもたちの活動など多彩でした。もともと歴史的にフランスは学校の外の文化活動が教育そのものであるという意識が強く、教育行政の名称自体、文化と学校という分け方をしていないのです。学校だけをとりあげるなら、公民形成の機関であるという意識が強いようです。

学校見学は2つしかなく、残念でした。そもそも学校日を実験的に8月24日に始めること自体がフランス国内での大ニュースで、私たち自身がフランス国営放送のニュースとして映っていたほどでした。

28日にみんなで見に行くことになっていた中学校では、帰国の飛行機の都合で私だけが視察しました。そこでは、特別クラスがあって、情報教育や美術などの自由な活動を希望の生徒が集まってやっていました。

その同じ日に、国境に近いというのでスイスのフランス語圏の研究所に立ち寄って来ました。そこでは、ピアジェの理論を発展させた社会構成主義による教科書、教材を作っていました。構成主義のカリキュラムは、理論が先行するというよりも、フレネの教育実践が基盤にあるという話でした。今度機会がありましたらお見せしたいと思います。フランス語圏ということで、教育に関しては国境の敷居が低いようです。



学校訪問

クジュロール村の公立小学校

パリからT. G. Vで、およそ2時間半。フランスの東部に位置する県は農業地帯の広がる緑豊かな村です。

児童数182名のこの学校は、多くの学校が週4日+半日の授業がある中で月火木金の4日間が授業日、水士日はお休みという体制で取り組んでいます。そのかわり夏のバカンスを短くして授業時間を確保しているそうです。

これは遠方から通う子供たちの保護者からの要望を受けて実現したということです。とはいえ、学習は、朝8時30分から～11時30分と、午後1時30分～4時30分という1日6時間の拘束が小学校1年生から実施というのは驚きました。

1クラスおよそ25人までで、小学生は5年生までの5クラス+中間クラスが2クラスあります。この中間クラスというのは編成上の基準はないけれども、年度当初職員の相談のもとで作られる複式学級の事です。

例えば、1年生が21人、2年生が20人、中間クラスは1年生11人、2年生7人が混じった編成になっています。中間クラスの担任は一人で、交互に授業を行い、他方の学年はその間、自習をしています。中間クラスの子どもは育ちがいいということで積極的にその制度を導入しているように見受けました。

T・T加配というものに似た制度としては、資格を持った人が援助するディプロムというものが、この小学校では情報処理の堪能な人と、ドイツ語のできる人が図書館司書の役割を果たしているということでした。目が行き届くという理由の他に失業率を減らすという目的もありますが、クラス内のレベル差に対応できる体制を取り入れています。

教科は国語、数学、地理、歴史、理科、体育、市民、美術で、4年生以上からドイツ語と英語のどちらかを選択するそうです。後で出会ったフランスの学生がナポレオンは戦争を仕掛けた人だから学校では習わない、といていたのが印象的でした。

教員の初任給は9000～25000フランで額は採用試験の成績で決まるそうです。

(1フラン・およそ16円)

(兵庫・岩崎純子)

MAILLEY (マイエ) 小学校

ブサンソンから40kmほど北へ行った小さな村の小学校です。小学校といっても保育所と小学校の子供たちが同じ校舎にいますし、幼稚園の5歳児と1年生が同じ教室にいるということは、日本の教育状況から考えると不思議な感じでした。

児童数は88名で、2歳から11歳までが4クラスに分かれています。2～4歳児が1クラスで、担任が1人と補助の先生がいます。そして、5～6歳で1クラス、7～8歳で1クラス、9～11歳で1クラスが構成され、それぞれのクラスに担任が1人ずつで、3クラスに2名の補助の先生がいます。

見学した5～6歳の教室では、6歳の1年生が教科書を机の上に載せて男性の先生と言葉の学習を進めています。同じ教室で、5歳児がお絵描きをしたり、ブロックをしたり、パソコンをしたりしていました。また、隣の小さな部屋では、3人の5歳児がイーゼルに貼った画用紙に絵の具でお絵描きをし、補助の先生がついて世話をしていました。

つぎの7～8歳児のクラスには、先生の言った数を個人持ちの白板(忘れた子供は、先生から借りた小黒板)に書いていました。そして数の位について学習していました。フランス語では、数字の言い方が複雑なので、丁寧に学習しているようでした。

この学校では、月～金まで児童を受け入れ、月水金は、8:15～12:15まで学習します。火木は、午後2:00～4:00の学習が付け加えられます。月火金の午後は、村で行っている課外活動に参加することができ、半数の児童は参加しているそうです。

複式学級については、お互いの学年のいいところを学び、先生も教材研究を熱心にするのでかえって効果があるという評価がされていることに驚きました。そして、同じ教室で学ぶ異学年の子供たちが、落ちついて静かに過ごしているのに感心しました。

(兵庫・谷口奈緒美)

フランスの幼稚園

コーナー遊びの様子など、全体の雰囲気は日本の公立の幼稚園と似ていました。いくつか見たこと感じたことを述べてみたいと思います。

○教育時間が午後4時までと長く、小学校高学年までと同じになっていて、日本の保育所の役割も兼ねていました。(日本でも幼保の役割関係の見直しや幼稚園の延長保育を考える動きが出ています。)

○昼は親がしごとの都合で迎えに来られないために教師と共に過ごす一部の幼児を除けば、家庭に帰って食事をとり、午後にはもう一度登園して来ています。(日本ではどうして無理ですが、幼児にはいろいろな面で良いと思いました。)

○2歳から就園できます。(日本は、私立では2歳児保育を考えているところもありますが多くの地域で公立の3歳児就園もまだまだです。)

○学級定員が少なく、3歳組で幼児16人に教師が2人でした。(日本は16人に教師が1人・・・どこの国の人も日本の話にびっくりします)

○年長児と小学1年生の混合クラスを見学することができました。幼少の育ちをつながりとして捉え、形にしているところがうらやましく感じました。

○自然がすばらしく、石づくりの家、城、街並みなど古いものが大切にされています。今子供たちが見ている風景は、おじいちゃんが子供の頃に見た風景とほとんど同じでしょう。

幼児も学童も静かに話を聞いていて、とても落ち着いてみえたのは、この環境と無縁ではないだろうと思いました。(私の大好きだった麦畑と町外れのお屋敷は、もう故郷にはありません)

(千葉・小山輝子)

★ アボンクール農場を訪ねて

「さあ、皆さんこれから調理実習です。」にこにこ迎えてくれた2人の農家のおかみさんの案内で私たちは厨房へ。自分たちで夕食の用意をするのである。食事準備が終わるとその材料のある農場へ。

一面の野菜畑。牧場では牛が草を食べている。鶏、鴨、うさぎまでいる。

同じ表でも鶏とうさぎはちがうよ。豚は何食べていると思う?」豚舎の横にはかわいいひよこも。最後には堆肥場まで見せてもらった。一皿の料理がどうしてできるのか、どんな命をいただいているのかが一目でわかる自然体験学習農場である。毎年、幼稚園や小学生が学校のカリキュラムの一環としてここを訪れるという。

いただいたパンフレットにこの農場の目的が明記されていた。「五感を育てる」「農業と食生活の関係を見出す」「四季を感じ生物と土の生命の神秘を見出し共感する」ひいては農業の暗いイメージを変え、農業従事者も育てていきたいという願いもあるらしい。学校と農家がタイアップして5年前に作られたこのシステムは、これからの総合学習の在り方の一つを示唆してくれたようだ。

(福岡・土井幸代)



教育委員会での交流会

★ ブサンソン市

8月24(木)の午後、教育委員会を表敬訪問した。教育委員長が(女性)等を交えて、記念撮影も行ったが、翌日の地方紙に「日本から23人の Professor が訪れた」と写真入りで大きく報道され、『我々は Professor か?』と戸惑うことしきり・・・。

フランスのSAM関係者の先生方も参加しての交流会(学習会)では、教育委員長等の挨拶に続いて23人の Professor の代表である浅沼教授から、謝辞も含めて話をしていただいた。

またSAMのスタッフでもある高校の物理の先生、コワリーさんからフランスにおけるSAMの取り組みや成果について実験発表があった。その後、40人程の参加者による歓迎会があり、一時ではあるがワインを飲みながらの歓談が行われた。

夜は市街を見下ろす城塞(17世紀)でのディナーとなった。満点の星空がとても美しく感じられた。

(神奈川・河合剛英)

★ 県の教育委員会訪問

8月25日、私たちは2校目の訪問校を大変興味深く見せていただいた後、ブサンソン教育委員会(地方丁の教育委員会)の一部であるウズールの教育委員会(県教委)にお招きをいただき、ラジットサン監視官(県教育長)をはじめ、職員の方々の歓待をうけた。

ここでの主な仕事は、小・中学校教員及び小学校事務職の人事(中・高等学校事務職と高校教員の人事は地方庁の教育員会の仕事)や児童の欠席状況の把握、そして教育活動全般の把握等であると説明いただいた。

フランスの教育制度は、ここ30年間、常に児童・生徒・学生をできる限り良い条件のもとで受け入れることに専念しており、政府は教育施設の建設とその維持に関するいくつかの管轄を地方公共団体(地方、県、市町村)に移し教育機関に大きな自主性を与えている。そして、今日この対策は成果を上げているとのことである。

日本の教育制度については、フランスから多くを学んでいると聞くが、現在進められている日本の教育改革の方向性とも重なるところが多い。
(滋賀 帖佐恵美子)

des métiers

L'académie
un groupe de
internationaux



Les 23 professeurs japonais resteront en France

Ne jamais être satisfait de soi et toujours se remettre en cause. Comparer et tirer les leçons qui s'imposent pour progresser. Tel est l'objectif que s'est fixé le projet « School Around the World » (SAW). Il s'agit en fait d'un projet international de développement professionnel des enseignants mené conjointement dans neuf pays: l'Allemagne, la France, le Japon, le Royaume-Uni, la Belgique, l'Espagne, l'Italie, les Pays-Bas et les États-Unis.

フランス全

フランスの
日本から多

S'inspirer des éducatives nippones

de Besançon accueille cette semaine
professeurs japonais dans le cadre d'un projet
de comparaison des systèmes éducatifs.



ligne Aleth Manin, recteur de
l'académie.

Souplesse du rythme éducatif

Programmée sur cinq années,
l'étude a porté essentiellement
sur la biologie au cours des
années 99/2000. Mais à partir
de 2001, elle se dirigera vers
les mathématiques. Une quin-
zaine d'établissements de la
région se sont associés à cette
étude, surtout en Haute-
Saône et dans le Doubs.

« Nous sommes déjà allés dans
plusieurs écoles et j'ai déjà pu
constater de nombreuses dif-
férences d'enseignements avec
notre pays » confie Shigeru
Asanuma, professeur à l'uni-
versité de Tokyo Gakugei.
« J'ai été frappé de voir la sou-
plesse du rythme éducatif. Ce
matin, nous sommes allés dans
une classe, les enfants avaient
déjà repris les cours. Les
élèves vont rentrer petit à
petit jusqu'au mois de sep-
tembre. Chez nous, tout le
monde rentre à la même date.
En revanche, chez nous ils
sont beaucoup plus auto-
nomes. Ils travaillent seuls.
Sinon, dans l'ensemble, nos
petits japonais étudient les
mêmes choses et beaucoup
d'auteurs français comme
Balzac, André Gide ou enco-
re Sartre ».

Ce projet, porteur d'innova-
tions et d'enrichissements,
demandant beaucoup de
recul, est un travail de longue
 haleine qui permettra peut-
être d'en tirer un système édu-
catif commun.

J. B.

che-Comté jusqu'au 28 août.

Photo Serge CUENOT

gne, l'Australie,
Hongkong, le
Portugal, le
i, la République
es États-Unis.
bjectifs est de
ie information
es enseignants
es éducatifs des
és, en particu-

lier sur les contenus et les
méthodes d'enseignements.
Dans le cadre de SAW, l'aca-
démie de Besançon accueille
depuis le 23 août et jusqu'au
28, un groupe de 23 profes-
seurs des écoles japonaises.
« Ils rencontrent un certain
nombre de leurs collègues
francs-comtois et visitent des
écoles de la région. C'est un

dispositif très intéressant, car
il ne s'agit pas de venir sim-
plement en visite dans la
région, mais surtout de com-
parer des systèmes pédago-
giques. Les professeurs com-
tois constatent comment sont
reçus leurs méthodes de tra-
vail par des professeurs de
culture différente. C'est très
riche d'enseignements », sou-

に大々的に報じられた私たちの訪問

放送のニュース番組、新聞に私たちの研修、
教授や教師が研修にやってきましたと報じられた。

フランスの文化・風土にふれて

★歴史が息づいているフランス

見事に手を加えられた豊かで広大な自然。数百年の歴史を秘めた石造りの建造物に満ちた街。その中には、ローマ時代の石の門さえ何気なく存在している。もちろんルーブルにもヴェルサイユにも感嘆した。しかし、特殊なそれらよりも、現在を〈歴史の最後の段階〉として実感しながら日常的に生きている、あるいは生きざるをえないフランス人の生活や文化に目を奪われた。

個性を尊重し、自由で創造的な教育を行っているフレネ学校の子供たちに私が落ち着きや健全さを感じたのも、この辺に理由があるのかもしれない。そういえば、ボーダンさんやリベイエールさんのもっていた落ち着きや古風とさえいえるたち振る舞いも、フランス的と言うべきだろう。若き日に熱読したサルトルやボオーボオワール。彼らは果たしてフランス的なのだろうか。こんなことも、これからの私のフランス研究の課題になりそうである。

(東京・宇田川宏)

★19歳・フランスの旅！

あこがれの街パリには、映画のワンシーンのような石畳や石造りの建物が立ち並んでいた。ルーブルやオルセー美術館などでは異国の文化にも触れ、ヨーロッパの歴史の重みに感動した。

ブサンソンでは、ゆったりとした時間の流れに浸ることができた。日没が9時過ぎで、日が長いせいもあったかもしれないが、お昼になると街に並ぶお店はしまってしまった。また、学校の昼休みも2時間もあり、幼稚園児や小学生たちは迎えに来てくれた母親と手をつなぎ、うれしそうに帰っていった。母親もその時間は昼休みだそうだ。日本の忙しい生活の中では考えられないことで、福祉の面でも充実しているなと思った。

大変楽しかったフランスの旅を終えて、今、自分の視野が大きく広がったのを感じている。世界の若者たちが交流し、ボランティア活動をする姿にも接した。言葉の通じないもどかしさも痛感した。河合菜保子さん、松本美樹さんとの出会いもうれしかった。これからの自分の生き方を考える大変よい機会になった。フランスの旅！ありがとう。(滋賀・帖佐 幸)

★フランスのおしゃれ考

「あれ、変だな。フランス人よりも日本人の方がおしゃれじゃないのかな」

パリについての第一印象である。「おしゃれの街パリ」これがフランスに着く前に持っていたパリについてのイメージだった。

ところが東京の新宿・渋谷を道行く若者の方が高価な服装をし、流行の服装を身につけている。パリが本家であるはずのヴィトンやシャネルなどのブランドのバックはむしろパリよりも東京で多く見かけた感すらある。

しかし、よく見てみるとパリを道行く人々はそれぞれが自分に似合った服を選んでおり、服装から個性さえ感じることができたのに対し、日本では派手な服を着、凝ったメイクをしていてもまるで制服のように全く同じ服装をしているだけである。

おしゃれとは本来自分をより美しくするために自分の価値感に基づき服装を選択するものであると考えている。しかし、日本においては眉毛を細くしたり、顔を黒く焼いたりしていても流行(周囲の人々)に合わせているだけであり、そこには周囲と同化していることでの安心感があるだけである。

また、高価なバッグをぶら下げていてもデザイン性よりもブランドという権威に自分の価値観を預けて安心しているあけである。これは、おしゃれの世界に限った話ではない。生活全般にわたって、周囲や立場が上の人に選択権も責任も預けて安心し、精神的な自立が遅れがちになっている部分があるのではないだろうか。「自分の価値観に基づき、自分で物事を決定できる人間」こういった人材を育てることが、我々教員に課せられているのではないかと感じた研修旅行であった。(千葉・湯浅 正幸)



★旅のエピソード

《その1》「花のパリでは、ゆめゆめ油断するなかれ」

観光客をねらうスリが多いようで、被害にあってしまった。また直接の被害はなかったが、オルセー美術館では気がついたらバックの中に子どもの手が伸びていた。

《その2》「私の周りを囲め」

治安がそれ程悪いとは思われなかったが、まあ用心するに越したことはない。そこで街角のキャッシュコーナーで現金を引き出す際には「私の周りを囲め」である。誰が言ったかは読者の想像に任せます。

《その3》「草っ原で就寝・・・？」

本場のワインは美味しく、またアルコール分がかなり高いものもある。ついついのみすぎるとダウンすることとなる。他のメンバーがディナーに舌鼓を打っている間に、自然の中でお休みした人がいた。誰とはいわない。

《その4》「globalなhappy birthday！」

8月25日は、宇田川先生の72歳の誕生日。当日は世界各地からボランティア活動に集まる青年との交流昼食会があったが、期せずして『happy birthday to 宇田川！』の大合唱とワインの乾杯となった次第・・・。(これに乗じて飲み過ぎた輩もいたがだれだっけ？)

(神奈川・河合多美子)

★ボランティア活動

フランシュコンテ地方の学校視察旅行の2日目マイエ町の学校を見学した後、バスに揺られ一路クールション町へ。

バスが到着するとテントの中から、たくさんの若者が現れ、私たちを迎えてくれた。この若者たちは若者平和協会(youth action for peace)の事業の一つとしてこの町に自費でやってきてボランティア活動を続けていた。

戦争で破壊された道、村々の再建、また問題を抱えた子どもを集めた活動などさまざまなことを行っているようだが、第一の目的は、「お互いの国のことを知る」という交流が目的のようだ。

この青年たちと一緒にテーブルにつき昼食をとりながら楽しいひとときを過ごすことができた。中でも、この青年たちと同世代の私たちの仲間のテーブルが盛り上がり、このまま、この町に残り、ボランティア活動を続けるのではないかという勢いであった。

この日は、宇田川先生のお誕生日でみんなで歌を歌って70歳のお誕生日を祝った。最後に青年たちの仕事の様子をみせてもらったが、一つ一つ手でレンガを積み上げ水門を修復していた。こういうボランティアもあるのだと感心させられた。

(佐賀・松本千代)

★古城での語らい

教育委員会の方との立食歓迎会ですっかり満腹になっていた私は、若者たちを送り届けることを口実にホテルに帰ろうとしていたのですが、中澤先生にレポーターを任じられ、笑顔で坂道を歩いてきました。

小高い丘のある古城から見る夕焼けは、神戸の六甲山から大阪湾を望む風景を思い出させてくれました。時刻はすでに8時を過ぎていました。テーブルは偶然日本人ばかりになっていました。関東、関西、九州の者がフランスの古城でワインを飲みながら話したことは、各地でのお餅のつき方や切り方、丸め方でした。

そのうちに日もとっぷり暮れ、次の日からのハードスケジュールを予想せずほろ酔い気分ホテルへと足を運びました。

(兵庫 村田彰一)



★フランスへ行ってみて

いろいろなところを見学してみて、フランスは学びたい人にやさしい国だと実感した。

あの名高いルーブル美術館の入場料は17歳以下の場合には無料であるし、ほかの美術館や博物館の場合もそうだった。中には25歳まで割引料金が設けられているところもあった。日本では、入場料が無料なのは小学生未満のところほとんどであり、全体的に高価なので、ちょっと見たいものがあったてもしり込みすることが多い。フランスのように手頃な値段で入ることができれば、もっと本物の芸術品に触れる機会が増えるのではないかと思う。

さらに感心したのが学費の安さだ。国立大学の一年間の学費はだいたい2万円前後なのだそう。また、留学生のも住宅手当が出るため、留学してもそれほどお金がかからないようである。お金がない学生にとって高い学費は悩みの種である。日本やアメリカでは学費のために何時間も働いている学生が多いが、フランスのように安ければ、バイトの時間を自分の好きな勉強をする時間に当てることが可能であろう。

(東京・松本美樹)

★パリへ行って

ルーブル美術館・・モナリザの本物を初めて見た。美術館の中は、とても広く初めて見る絵や彫刻がいっぱいあった。

ノートルダム寺院・・一番上から見る景色はすごかった。塔の中にはすごく大きい鐘があった。せまく急な階段をぐるぐる回って上ったので上に着いたら目が回った。でも「2時間待ったかいいがあった」と思った。

オルセー美術館・・日本人がいっぱいいた。学校の教科書に出てくる絵があった。

エッフェル塔・・エレベーターが混んでいた。僕は父さんと浅沼先生と松本さんのお母さんの4人で階段を歩いて上がった。2階から1番上まではエレベーターで上った。上まで行ってみるとエレベーター組はまだ来ていなかった。階段は1653段あった。

2学期が始まって、なかなか日本の生活になれなかった。

(神奈川・小林哲貴・小学生)

★フランスでソムリエ気分!

ブサンソンから車で役時間行った jura (ジュラ) 地方。一面の葡萄畑。シャ・トゥ・シャロンワイン工場に着く。珍しい黄いワインをいただき、ソムリエ研修に入る。

ワイングラスを傾け、色を見る。ワイングラスの足を持ってゆらす。涙のように流れてくる。早く流れるとアルコール度が高い。ゆっくり流れると低い。ワインの表面(透明の部分)が薄いと酸味が強い。厚いと弱い。ワイングラスは香りが飛ばないように上は狭い

よく嗅ぐとフルーツ、ドライフルーツ、白い実のフルーツそして動物のような香りもする。「うーん、このワインのお味はいかが?」

(東京・川島 良代)



★ワイン博物館にて

ワイン博物館の研究員の話聞いて、ワイン作りと個性化教育はある種通じるところがあると感じました。

史曰く「その年々でブドウの出来具合が変わるのだから、それに応じたワインの作り方がある。」「土の性質を最大限活かすようなブドウの生育の仕方が大切である。」と言うことです。これからは、子どもとブドウをオーラップさせ、より、おいしいワインを飲みたいや作りたと思います。

ちなみに、あれからワインを飲む度にグラスを回したり、光にかざしたりしてみたり、香りを嗅いだりしているのは、きっと私だけではないことでしょう。

(神奈川・小林哲功)

